

紅くない世界から観た「紅い戦争」

——特集1「紅い戦争の記憶」によせて

中山大将

「紅い戦争の記憶」という特集タイトルを見て、評者の頭にまず浮かんだのは学生時代に見たスヴェトラーナ・アレクシエーヴィチに関するNHKのドキュメンタリー番組「ロシア 小さな人々の記録」であった。越野剛論文や前田しほ論文も彼女の作品に言及しており、本特集は、作家・アレクシエーヴィチが取材した戦争の記憶だけでなく、中国やベトナムの事例を取り込みながら「紅い戦争の記憶」を研究者が読み解く試みであるともいえる。

評者は日本植民地史研究の一環として、現在はロシア連邦の一部となっているサハリン島南部、かつての「樺太」の歴史研究から研究生生活を始めた者である。したがって、どちらかといえば、この特集を「戦線」の向こう側から検討する立場にある。「特集にあたって」の中で、越野は特

集のねらいを「旧ソ連・中国・ベトナムの戦争の記憶を比較することで社会主義文化の共通点と差異を見出すこと」（一四～一五頁）としているが、上記のような立場にある評者は、さらに非社会主義文化と比較した際の社会主義文化の特有性というものも視野に入れながら、興味深く本特集を読むこととなった。

特集の構造から見ると、前田論文、高山陽子論文、平山陽洋論文は、旧ソ連圏、中華人民共和国、ベトナム社会主義共和国各国における戦争の記憶を、現段階での表象のみを論じるのではなく、その成立過程を丁寧を追うことにより表象史とでもいうべきものを整理している。さらに旧ソ連圏については越野論文が、ベトナムについては今井昭夫論文が、表象のメイン・ストリームから外れる戦争の記憶

のありようについて論じており、前述の表象史を補完している。また、田村容子論文は、戦争の記憶の一形態である革命模範劇におけるコードの読み解きを紹介することで、戦争の記憶をめぐる表象の多様性を提示している。

非社会主義圏に足場を置いて研究を始めながらも、旧社会主義圏をフィールドにするようになった評者にとつて、「男女の平等」と「民族の平等」は社会主義体制を特徴づける理念である。非社会主義圏における民族や性の抑圧構造を研究しないしは実生活を通して観てきた者にとつては、あまりにも牧歌的な認識であろうと自ら認めつつも、青く見える隣の芝生に人類の良心に対する一縷の望みをかけてしまっているのである。そこで以下では、まずは男女と民族の平等という観点を中心に本特集の論点を整理してみたい。

「男女の平等」という観点については、前田論文が記念碑やポスターの中の女性像に関して、田村論文が革命模範劇の中の女性像に関して論じている。その両者で明らかにするのは、それらの戦争の記憶の領域において、男女は決して平等に扱われてはいないということである。戦時には実際に女性たちが担っていたはずの役割が、戦後に女性たちに押し付けられた女性像に基づき、過小評価されるか、あるいは隠蔽され、再編成されてしまうことを両論文は示

している。ただし、前田論文における「近代的家父長制」というものを、非社会主義圏、たとえば専業主婦像を強調する当時の資本主義国家のそれと系譜を同じくするものとして理解してよいのかという点についての言及や検討があればより議論が充実したものになったと思われる。

また、田村論文では『生殖』を禁忌とする原則（一〇五頁）が革命模範劇における女性登場人物の人物像を規定していることを明らかにしているものの、この原則の源泉について十分に明らかにしていないように思われる。たとえば、毛沢東の三番目の妻・賀子珍は長征の間に出産をしており、なおかつ賀子珍はブルジョア的専業主婦ではなく、革命に身を投じる共産党員であった。同じく東アジアの社会主義革命家のひとりである金日成の妻・金正淑も同様で、抗日パルチザン運動の中で子を産み育てている。もちろん、賀子珍については、後妻の江青の影響を考慮すべきかもしれないが、賀子珍や金正淑だけが長征や抗日戦争中に出産した革命女性ではあるまい。そのように考えれば、「産みながら戦い育てる」という革命女性像も結び得たはずである。なぜ、革命女性たちは革命模範劇内において「避妊」させられているのか。前田論文では「産む身体」（生物学的再生産構造）の強調が指摘された一方で、

田村論文では「産まない身体」の強調が指摘されている。前述した社会主義国家における近代的家父長制という観念を手がかりに、この両者の差異を我々ほどのように理解できるであろうか。

「民族の平等」については、越野論文がハティニ村の事例において、社会主義体制下では抑圧されていた戦争の記憶における民族間の加害／被害関係がポスト社会主義期に入って表面化したことを示している。だとすれば、社会主義体制を維持している他の二国も、社会主義体制崩壊後には戦争の記憶をめぐる民族間対立が表面化する可能性を十分に有していると考えられるのは自ずと関心が湧く問題である。

越野論文の事例は、記憶の抑圧という消極的側面に関するものであったが、社会主義体制下でのエスニック・マイノリティの「紅い戦争の記憶」の積極的な動員についての考察があってもよかつたのではないか。「紅い戦争」は民族解放という「正義」を掲げているはずである。それは民族復興や生存圏拡大を掲げるファシズム国家側の「紅くない戦争」に対抗し、自己の暴力の正当性を主張するための重要な理念である。そうした中で、エスニック・マイノリティはいかに表象され、それがいかなる社会主義的理念を

の使命を自ら引き受けていたと考えるならば、相互の戦争が時期的に近接していたとしても、ソ連と中国・ベトナムの兵士たちのモチベーションや戦後社会における認識は大きく異なっていたといえるはずである。

また、国家内の地域差というものも、看過すべきではないだろう。たとえば、対外戦争と内戦双方の現場となったロシア極東ハバロフスクのコムソモール広場に現在聳えるのは、内戦に関するモニュメントである。この広場はハバロフスクのメイン通りの一端にあり、もう一端にはレーニン像のあるレーニン広場があることから、都市計画上のこのモニュメントの重要性が読み取れる。同じ国家内でも、地域ごとに各戦争に対する重みづけには差があるはずである。その意味において、越野論文における、ハティニ村の事例から旧ソ連、独立後のベラルーシ、そしてよりローカルでパーソナルなレベルまでを視野に入れた多層的な分析は、記憶の複雑さを明らかにした点において重要な意味を持つ。

続けていえば、「地域研究」として、もう少し現地の声というものを反映させてもよかつたのではないかというのも率直な感想である。たとえば、高山論文が取り上げている中国各地の烈士陵园の入り口には「愛国主義教育基地」

背景とした「紅い」現象であるのかについての言及が多少でもあれば、特集としての完成度がより増したであろうと思われた。

ところで、本特集では、主に第二次世界大戦とその前後に続く内戦が主な対象となっているが、ソ連とその他の国ではこれらの時期の戦争の意味づけは異なっているのではないだろうか。ソ連にとって第二次世界大戦は祖国防衛戦争であったが、中国とベトナムにとつての抗日戦争や独立戦争、そしてそれに続く内戦は、社会主義政権確立過程であり社会主義革命の一環であるという側面も強かつたはずだからである。その意味でいえばソ連側の比較事例は、第二次世界大戦時の十月革命後に結ばれたプレスト・リトフスク講和の後に起きた内戦であるべきではないかと思われるのである。

戦争の位置づけの違いは、前田論文が指摘した、帝政ロシアが日露戦争や第一次世界大戦において用いていた「母なるロシア」の表象が「大祖国戦争」において再動員されたこと（三四～三五頁）とも深く関係していると思われる。大祖国戦争においてソ連軍兵士は故郷を防衛するため戦つたが、抗日戦争、独立戦争や内戦において中国やベトナムの兵士は故郷を防衛すると同時にそれを「解放」す

など政府の認定資格を示す金属プレートが並べ立てられているが、評者が周囲の二〇代の中国人に聞いた限りでは小学校の遠足のような行事で訪れた以外は特に関わりもなく、とりたてて印象もないそうだからである。また、緑が多いので近所の高齢者の憩いの場となつているとも見聞きしたことがある。烈士陵园の発するメッセージは、若い世代にとつては上の世代から押し付けられた記憶でしかなく、それが屈折した形で、近年見られる毛沢東時代のパロディ的表象の発生（五六頁）につながっているのかもしれない。

表象研究に対する批判の常套句かもしれないが、ある表象に対してある解釈ができるということと、それを住民がその通りに受け止めているということとは当然ながら別問題である。中国山西省日本軍残留問題を描いたドキュメンタリー映画『蟻の兵隊』の中で主人公の元軍人が、靖国神社の祭りに来ている若者に靖国神社の意味を知っているのかを尋ねるが、その若者はただ祭りの賑わいを楽しみに来ているだけで、靖国神社自体に何の関心もないと答えるシーンがある。そしてそのシーンに続くのは、同じ祭りの場で演説を終え演壇から降りてきた小野田寛郎元少尉を「戦争を美化するのか」と主人公が問い詰めるシーンであ

る。戦争の「記憶」をめぐる空間で表出した三者（あるいはカメラを向けている制作者も含めた四者）の間での認識の断絶があまりにも鮮やかに描き出されている。その意味でも、今井論文が公的記憶から漏れ落ちていた人々の記憶の社会化の過程を当事者たちの声を織り交ぜて論じたことや、平山論文がメディアから記念碑への批判的な言説を拾い上げたことは、表象分析と現場との距離感を縮めることに成功している。他の著者においても、現地で同様の聞き取り調査やメディア調査を行っているのだろうが、それが論文に反映されていないのは、紙幅の問題もあるものの、本誌が地域研究雑誌であるという面から見れば読者としては惜しく思った。

しかし、本特集が個別地域の研究誌ではなく総合的な地域研究誌である本誌から発信されたことは高く評価すべきと評者は考えている。なぜならば、これは自戒も込めて書くのであるが、日本や東アジアを主に論じる論者の中には、社会主義という人類史的経験を看過しているかのような記述がしばしば見られるからである。たとえば、最近刊行された酒井直樹の戦後日本における国民主義に関する論文は、西川長夫が晩年に展開した〈新〉植民地主義論を手がかりに、「戦後一貫して日本は合州国の属国の立場に甘

んじ日本国民は半植民地条件下に置かれて」（酒井二〇一五・三三）きたとして、日本をめぐる戦後国際秩序やその国民主義について論じているものの、同時期に類似した国際関係に置かれていたと考えられるソ連とその影響下にあった東側諸国についての言及や検討がその議論の過程において見られないために、そうした戦後日米関係が類例のない独特なものであるという印象を読者は受けかねない。私は日本や米国など資本主義圏の「免罪」のために社会主義圏の話を持ち出そうなどは微塵も考えていないし、酒井の議論が連合王国なども視野に入れており議論の普遍性を志向している面があることも、さらに該論文の意義自体も否定するつもりはないが、二〇世紀におけるかかる「属国」関係をめぐる議論の死角を読者に与えてしまっているように思えてならないのである。

「紅い戦争」の戦線の向こう側には「紅くない戦争」があり、その記憶がある。その比較は、社会主義文化および非社会主義文化の比較に通じるであろうし、それは多様な近代とその結果としての多様な現代を我々が理解するための必要不可欠な道筋のひとつである。本特集はそのための重要な試みであると評者は評価するとともに、地理的にも手法的にもより広範な共同研究の展開を期待する。

●付記

本稿脱稿後に、本稿および特集本編でも言及されているペラルーシの作家、スヴェトラナ・アレクシエヴィチのノーベル文学賞受賞が報じられた。これを機に日本でも彼女の作品と紅い戦争の記憶への関心が高まることを望む。

●参考文献

酒井直樹（二〇一五）「バックス・アメリカカーナの終焉とひきこもりの国民主義——西川長夫の〈新〉植民地主義論をめぐる「思想」第一〇九五号、二一—五七頁。

●ドキュメンタリー番組・映画

『NHKスペシャル ロシア 小さき人々の記録』NHK制作、初回放送二〇〇〇年一月四日。

『蟻の兵隊』池谷薫監督、二〇〇六年日本公開。

●著者紹介

- ①氏名……中山大将（なかやま・たいしょう）。
- ②所属・職名……京都大学地域研究統合情報センター・助教。
- ③生年・出身地……一九八〇年・北海道。
- ④専門分野・地域……境界地域史・サハリン島。
- ⑤学歴……京都大学大学院農学研究科博士後期課程修了。
- ⑥職歴……京都大学大学院文学研究科・GCOE研究員（二九歳、二年）、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター・日本学術振興会特別研究員PD（三二歳、三年）。
- ⑦現地滞在経験……中華人民共和国三ヶ月間（京都エラスムス計画による派遣）。
- ⑧研究方法……公文書やメディア資料だけではなく、民間の団体や個人資料の収集活用も重視しているほか、インタビュー調査も実施している。
- ⑨所属学会……日本農業史学会、日本移民学会、Association for Borderlands Studies。
- ⑩研究上の画期……二〇一二年の尖閣諸島国有化。中国滞在中であり、宿泊拒否などに遭いながらも現地の友人たちの助けを得ながら、反日のビジネス化、漢奸観念や反日熱の地域差・個人差、メディア報道と実態の相違などを体験し、「現地」（フィールド）の重要性の再認識と、人文社会科学の社会的役割を再考する契機となった。
- ⑪推薦図書……アレクサンダー・C・ディーナー、ジョシュア・ヘーガン『境界から世界を見る——ボーダースタディーズ入門』川久保文紀訳、岩下明裕解説、岩波書店、二〇一五年。